

1

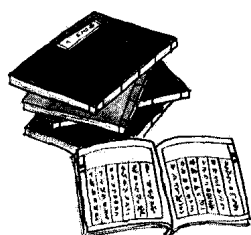
六〇四～九四〇（奈良～平安）

古典の事典

精髓を読む

日本版

河出書房新社版



古典の事典へ精髓を読む——日本版——

② 九五六一一〇八六（平安）

昭和六十一年六月十七日 第一刷発行

編纂 古典の事典編纂委員会

発行者 清水 勝

株式会社 河出書房新社

発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十三番二号
電話〇三―四〇四―一二〇一

印刷 大日本印刷株式会社
株式会社 サンコー

製本 大日本製本株式会社

©1986 無断転載複製を厳禁する

ISBN4-309-90202-2 C0591

① 六〇四、九四〇（奈良、平安時代）

もくじ

まえがき はじめて文字に記された古代の心

古事記

古代にはせる日本人の心の故郷

万葉集

民族の古典と呼ぶにふさわしい歌集

古今和歌集

わが国最初の勅撰和歌集

竹取物語

わが国の物語文学の源流

日本靈異記

仏教の教えを説いた説話集

土佐日記

日本文学史上の画期をなす和文日記

懷風藻

中国詩から学んだ日本最初の漢詩集



上宮聖德法王帝説

一一三

古代史の謎にかかわる伝記史料

家 伝

一一三

藤原氏の祖、鎌足と武智麻呂の伝記

唐大和上東征伝

一一三

鑑真の苦難に満ちた渡海行と生涯

藤原保則伝

一一四

平安期の良吏の典型を描く伝記

播磨国風土記

一一五

古代史を知るための重要な手がかり

常陸国風土記

一一六

詔を受けて編纂された漢文地誌

出雲国風土記

一一七

出雲神話の宝庫たる地誌

三経義疏

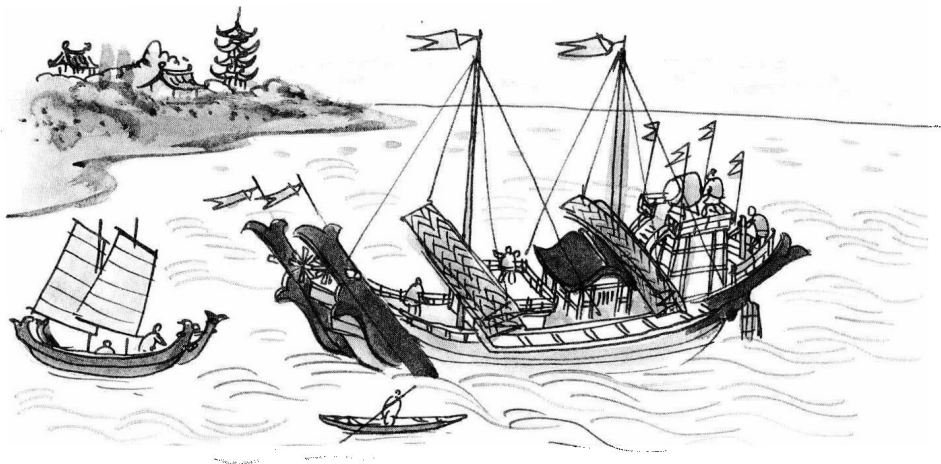
一一八

皇族出身の在家が著す最高の注釈書

三教指帰

一二〇

人生と世界を展望する透徹した眼



山家学生式

仏教界革新に燃える熱意の書

三二三

顕戒論

南都仏教に抗し著した天台教学論

三二三

十住心論

弘法大師による真言宗確立の書

三三三

憲法十七条

日本最古の法律、役人への教訓

三四七

養老律令

中央集権制を目指す古代の基本法典

三五七

延喜式

律令の施行細則を集大成

三六九

本草和名

日本最古の薬名辞典

三七九

新撰字鏡

和訓を有するわが国最古の字書

三八九

倭名類聚抄

わが国最古の漢和対訳の大辞書

三九七



この事典を利用される前に

○第一巻について

(一)この巻では、六〇四（推古三）年から九四〇（天慶三）年の間に成立・刊行された古典を三十四作品収録しました。成立・刊行年の未詳のものについては、作者の生没年を拠りどころとしました。

(二)この巻に収録した古典は、それぞれ文学、歴史、宗教・哲学、社会、科学、雑書のジャンルに大別して、時代順に配列してあります。

○中扉について

(一)収録古典にはすべて中扉をもうけて、分野、書名、著者・編集名、「この古典の五つの魅力」を表示し、原本写真を掲載しました。

(二)書名、著者・編者名などに二つ以上の書き表し方、よび名がある場合には、学界・教育界で定説となっているもの、一般に広く用いられているもので表記することにしました。

(三)中扉の「この古典の五つの魅力」では、作品の要点、分野、歴史的価値、後世への影響、現代との関わりなど五つの要点から、その古典の特色を簡潔にまとめました。

(四)また中扉には、現存する貴重な原本（版本・写本・古活字本など）から、本文の一部を写真版で掲載しました。とくにこの巻でとりあげた「読みどころ」と関連の深い箇所は、参照頁を表示することにしました。

○解説について

(一)作品の解説は原則として「あらまし」「原典の構成」「成立の時代」「影

響と価値」「原典と参考書」「作品の舞台」「しおり」の七項目をもうけ、どこからでも容易に検索、読めるようにしました。ただし、作品によっては、必ずしも適合しない項目もあり、その場合には他の詳記すべき項目に重点をおき、その項目は省略することにしました。

○読みどころについて

(一)読みどころでは作品の重要な場面、また一般に多く引用される箇所を抄出して、上段に原文を、下段に現代文を併載しました。

(二)主要な作品については、鑑賞の手引きとなるように、現代文の冒頭に抄出箇所の概要を添えることにしました。

(三)原文の仮名づかいは原則として、歴史的仮名づかいにしましたが、読みやすさを考慮して、ふりがなは現代仮名づかいとしました。ふりがなは外国の地名や特殊な用語を除き、すべて平がなで付すことにしました。

(四)原文も新たにふりがな・送りがな・濁点・句読点・並列点（中黒）・段落を施し、さらに会話文・引用文には「」や「」を、書名には『』を加え読みやすくしました。また原文中の割注・頭注は（）でくくり、他の引用文と区別しました。

(五)原文中の／＼、などのくり返し符号は使用せず同字を重ね、漢文体も読み下し文（平がなまじり文）にして、原文の読解鑑賞に役立つように配慮しました。

(六)現代文は、わかりやすい内容にするために、難解な語句は説明を補記し、また旧地名は現地名を、和暦年数は西暦年数を表示することにしました。

○監修者

石井良助（東京大学名誉教授・法学博士）

伊藤鄭爾（元工學院大学学長・工学博士）

井上靖（小説家・芸術院会員）

数江教一（中央大学名誉教授・文学博士）

角田文衛（平安博物館館長・文学博士）

暉峻康隆（早稲田大学名誉教授・文学博士）

奈良本辰也（歴史家）

古川哲史（東京大学名誉教授・文学博士）

松浪信三郎（早稲田大学名誉教授）

山本健吉（文芸評論家・芸術院会員）

○編纂者

朝倉治彦（国立国会図書館司書）

遠藤武（文化女子大学教授・文学博士）

大曾根章介（中央大学教授・文学博士）

北小路健（歴史家）

紀田順一郎（評論家）

久保田淳（東京大学教授・文学博士）

祖父江孝男（放送大学教授）

田辺聖子（小説家）

谷沢永一（関西大学教授・文学博士）

馬場あき子（歌人）

春田宣（国学院大学教授・文学博士）

松田修（法政大学教授）

松本寧至（二松学舎大学教授・文学博士）

黛弘道（学習院大学教授・文学博士）

宮田登（筑波大学教授・文学博士）

吉田豊（歴史家）

まえがき 1

はじめて文字に記された古代の心

‡ 文字に記された民族の魂の古墳

『古典の事典 日本版』第一巻には、元明天皇の和銅五年（七二二）、太安万侶によって編纂された、現存するわが国最古の古典『古事記』から始まって、平安時代初頭までの約二世紀の間に成立した多彩な書物が紹介されています。

この時期の古典の著しい特徴は、文字による記録がまだ行われなかった時代から伝承されてきた神話、伝説、物語、歌謡などで、はじめて書物という形にまとめられたものが数多く含まれていることです。

『古事記』『日本書紀』『風土記』をはじめとするそうした古典は、その成立より数百年も昔にさかのぼって、当時の民族の心を今に伝えてくれる、文字で記された古墳ということができます。

もっとも、最古の古典である『古事記』にしても、かつて信じられていたように「神代」からの言い伝えを暗誦していた稗田阿礼の言葉を、太安万侶がそのまま記録するといった単純な過程で作られたわけではありません。

『古事記』の編纂は、続いて行われた『風土記』『日本書紀』の編纂と同じく、壬申の乱からまだ半世紀もたっていないかった古代律令国家の権威確立のために企てられた国家的事業でした。

したがって安万侶は、朝廷の命令にもとづいて、現在は伝わっていないそれ以前のさまざまな記録や、稗田阿礼をはじめとする語り部たちの言葉から取捨選択して、天皇家の歩みを「神代」にまでさかのぼって再構成したのです。

その過程で、天皇家、および当時、国政の実権を握りつつあった藤原氏の意向が強く反映していることは容

易に想像されます。

しかし、だからといって、これら最古の古典が、民族の魂のふるさとを尋ねるうえでかけがえのない価値を持つていることに変わりはありません。

当時の為政者たちの作為が働いているにもかかわらず、そこには古代の人々の心が豊かに息づいており、素朴な言葉で語られている思考や感情が、現代に生きる私たちに意外なほど共感できることも少なくないのです。そこにみられる私たちの遠い祖先の考え方、感じ方の中から、際立ったものをいくつかあげてみましょう。

＋言葉の持つ威力への信仰

私たちは、正月に顔を合わせると、お互いに「おめでとう」の挨拶を交わします。すると、いろいろな悩みを一時忘れて、なんとなくおめでたい気分になります。また、誰かにひどい仕打ちを受けたときは「くたばってしまえ」とつぶやいて、うつぶんをはらすかもしれません。

古代の人々は、このような言葉には、もっと直接的な働きがあると信じていました。「おめでとう」と言えば本当におめでたい状態が生まれ、「くたばってしまえ」と言えばその相手は本当に死んでしまうと考えたのです。この言葉の威力を言霊ことたまといいます。

『万葉集』巻一には、舒明天皇じゆめいが大和の国を讀よみえた「大和には群山むらみあれど……」に始まる美しい長歌が収められています。平和で豊かな大和平野の風物を謳うたって「うまし国ぞ あきづ島大和の国は」で終わるこの歌は、単なる現実の描写ではなく、この国がいつまでも栄え続けるようにとの祝福の祈りなのです。

また『摂津国風土記』せつづくふどき（逸文いつぶん）には、つぎのような説話が収められています。

この国の夢野（今の神戸市内）に鹿の夫婦がいて、その夫は淡路島あわじしまに住む愛人（？）のところへたびたび泳いで通っていました。

ある夜、夫は、自分の背中に雪が降りかかり、また、背にススキが生えた夢をみて妻に話します。夫の不貞

を憎んでいた妻は「白い雪がかかったのは、あなたの肉が塩をかけて食べられるし、ススキは背中に矢を射かけられるしでしょう」と言います。

それでも夫は海を泳いで淡路島に渡ろうとすると、途中で舟に会い、背に矢をうちこまれて殺されてしまいました。この夫の不幸を招いたのは妻の言葉だったのです。

このような信仰を持っていた古代の人々は、祭りの場では、こうあってほしいと願う「寿詞」を心から唱え、これが文学の源流となりました。また、邪悪な目的で呪いの言葉を口にすることは、それだけで、直接、人を害する犯罪とされました。

このような言葉の威力を、山上憶良は遣唐使に寄せた長歌「好去好来之歌」（『万葉集』巻五）で、

そらみつ やまとの国は 皇神の いつくしき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今

の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり
と讃えています。

† 清浄潔白への強い志向

わが国の古代の精神生活で際立っているのは、清浄潔白を尊重し、汚れを嫌悪する傾向がきわめて強いことです。

江戸時代長崎の町人学者、西川如見は、その『町人囊』で「日本正月の儀式、神代の風俗をうつして、清浄質朴を本としたる礼法なり」と述べていますが、たしかに仏教伝来以前の日本人の美意識は、清らかな水、緑の松や榊、人工を加えぬ素木の肌などに象徴される、清潔さ、自然さを最上のものとしてきました。これを最もみごとに具現化しているのが、皇室の祖神を祀る伊勢神宮の建築です。その一切の虚飾を排した素木造りの神殿は、同じ神社建築の中でも大陸文明の影響を色濃く受けた宇佐神宮や春日大社の華麗さとは著しい対照を示しています。

伊勢神宮の建築にみられるような、吟味された自然の素材そのものが持つ清らかな持ち味を大切に志向は、料理、服飾、工芸、茶道、造園など、さまざまな伝統文化に受け継がれて、「日本的」と称される美の世界を形づくっています。

清浄潔白を重んじる美意識は、倫理、道德の面にも強く影響し、ときとして「良い、悪い」より「清い、汚い」のほうを重視する傾向を生んでいます。今でも私たちは、人から「悪いやつだ」と言われるより「汚いやつだ」と言われたほうが、より屈辱を感じるのはないでしょうか。

古代における穢れへの嫌悪と恐怖の強さをよく示しているのが『古事記』にみるイザナギノミコトの黄泉の国（死者の国）訪問の説話です。黄泉の国に妻のイザナミを訪ねたイザナギは、醜悪な妻の姿におどろいて逃げ出すと、怒ったイザナミは悪鬼に跡を追わせるのです。イザナギにとっては亡き妻に対する愛惜の思いより、死の穢れに対する嫌悪の情のほうがはるかに強かったのです。

そして、ようやく地上に逃れ出たイザナギは、海の水を浴びてみそぎをすることにより、穢れを払って清浄な身となりました。

現代でも、私たちは葬儀に参列したあと、自宅に入る前に塩で「お清め」をしますが、あの塩は海水のシンボルであり、死の穢れを払う霊力を持つと考えられてきたのです。

日本古代の観念の大きな特色として「罪」と「穢れ」の区別があいまいなこと、「罪」に対する意識が稀薄なことが指摘されています。

それを最もよく示しているのが、『延喜式』（延喜五年＝九〇五）に収められている「六月の晦の大祓」（六月と十二月の終わりの日に穢れを払う祭事）の祝詞です。

そこには天つ罪（神の世界の罪）として、農耕を妨げたり、不潔なものを撒きちらしたりする行為が、また国つ罪（人間界の罪）として、病氣、人を呪うこと、性のタブーを犯すことなどがあげられています。

そしてふしぎなことに、人間の普遍的な罪として、キリスト教の「モーゼの十戒」や仏教の「五戒」にも掲げられている盗み、殺人、うそなどは入っていません。

そこからみると、当時の人々にとっての罪とは、私たちが考えるような、人の道に反する行為ということではなくて、単に、忌まわしいこと、穢らわしいことを指しているようです。簡単に言ってしまうと、古代の人々は、罪と穢れの区別をほとんど意識していなかったように思われるのです。

そのことは、この祝詞の後段をみるとさらにはっきりします。

「大祓え」の祭事でみそぎをすると、すべての罪穢れは水に流されます。そして川の流れ、河口、海中、海底と流されていくにつれて、それぞれの場所を受け持つ神々によって浄化され、あとかたもなく消えてしまふと説かれています。

そこには、罪を犯した者の「悔い改め」も「因果応報」もなく、ただ「水に流し」てしまえば、あとはすべて神様が始末してくださるのですから、こんな気楽な話はありません。

現代日本人の思想的弱点としてしばしば指摘される、過去にみずから犯した過ちに対する健忘症的な無責任ぶりのルーツは、案外、こんなところにあるのかもしれない。

↓ 海の彼方の理想郷へのあこがれ

古代の物語や歌謡のモチーフとしてしばしばみられるのが、海の彼方の楽土へのあこがれです。

アジア大陸の東端に位置し、気候温暖なこの列島には、遠く縄文の昔から、大陸や南方の島々からの渡来人がつぎつぎと訪れ、定住してきました。

四世紀ごろになると、朝鮮半島や中国大陆の戦乱を逃れて多くの人々がこの国に渡り、彼の地の先進文明をもたらししました。

昭和五十三年（一九七八）、埼玉県稻荷山古墳から発掘された鉄剣をレントゲン照射して判読した文字によ

れば、五、六世紀のころには、すでに帰化人によって文字が伝わっていたことが知られます。

当時の日本土着の人々は、海の彼方からもたらされる進んだ文化に接して、まだ見ぬ異国へのあこがれをそそられ、また、つぎつぎとやってきた渡来人たちは心ならずも捨ててきたふるさとへの望郷の念を抱かずにはいられませんでした。このあこがれと郷愁とが何世代にもわたって蓄積され、融合して、日本民族の海外へのあこがれと好奇心を育んできたのです。

彼らは海の彼方、または海の底に永遠の理想郷である「常世の国」を夢みて、さまざまなかたちの竜宮伝説を生み出してきました。

その最も美しい伝説の一つである、『丹後国風土記』(逸文)にある浦島の子の物語によれば、竜宮を訪れて亀の化身の姫と結ばれた浦島の子は、この国に戻ってから、開けてはならないと言われていた玉手箱を開けてしまったために、二度と姫に会うことができなくなります。そして、こう嘆くのでした。

子らに恋ひ 朝戸を開き 吾がおれば 常世の浜の 浪の音聞こゆ

岸に打ち寄せる波の音に、はるかな理想の異境を空想したのは、浦島の子だけではありません。

中世のころ、熊野の浜から、遠い観音の聖地を目ざして帰らぬ船出をした「補陀落渡海」の行者たちも、はじめて接した西欧文明に惹かれて殉教への道を歩んだ安土桃山時代のキリシタンたちも、さらには近代の出発点で欧化熱にとりつかれた明治のインテリ青年たちも、すべてまだ見ぬ楽土へのあこがれにつき動かされた人々でした。

このような民族の伝統が、外来の文明を積極的に摂取して、みずからの血肉とするうえで、大きく役立ってきたことはいまでもありません。

† 非運の貴公子の流浪のものがたり

古来、わが国の文芸で最も愛されてきたテーマとして、不幸な貴公子の受難と放浪の旅があります。折口信

夫によつて「貴種流離譚」と名づけられたこの種の物語の最も古い典型は『古事記』『日本書紀』にみる日本武尊の悲劇です。

尊は景行天皇の皇子として生まれ、皇位を継ぐべき高い身分にありましたが、あまりに武勇にすぐれていたためか、父帝にうとまれ、ひっきりなしに各地の叛乱鎮圧を命じられます。

ようやく九州と出雲の敵を制圧して戻ってきたばかりの尊に対して、天皇は無情にも、ろくに兵も与えず、東国の平定を命じます。

尊は、姨の倭比売を訪ねて「天皇は私に死ねとおっしゃるのでしょうか」と泣く泣く訴えますが、意を決して出陣します。そして、焼津の原では賊が放った野火の難から草薙剣の威力によつて免れ、走水（浦賀水道）の海上では暴風に見舞われ、愛妃弟橘姫が投身して海神に身を捧げたことで危機を脱するなど、さまざまな試練に見舞われます。

しかし、ついに能煩野（三重県鈴鹿郡）で病のためにこの世を去るのです。
そのときに歌われたという、

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣山隠れる 倭しうるはし

は、もともとは大和の国讃めの歌かとも言われていますが、悲劇の皇子の最期を飾るにふさわしい絶唱として、古代歌謡中随一の傑作とされています。

たたかいの中に愛と冒険の短い生涯を終えた日本武尊の物語は、中世以来、日本人に愛され続けてきた義経伝説ときわめて近い骨格を備えています。尊を義経に、天皇を頼朝に、弟橘姫を静御前にあてはめるならば、この二つが、日本を代表する英雄叙事詩であることがよく理解できましよう。

一方、道ならぬ恋に生き、恋に殉じた悲劇としては、同じく『古事記』に収められている軽太子と衣通姫の物語があげられます。